

論文

天安門広場の空間政治学

——観光を通じてみる中国のモダニティ(1)——¹⁾

大 畑 裕 嗣

要約

中国の近現代が日本のそれとは非常に違った特徴を持つことは言うまでもない。中国近現代史に関する従来の研究はその特徴を明らかにしようと努力してきた。

「観光対象と観光行動」という、伝統的な歴史研究とは異なった観点から中国近現代史上の重要な場所を扱うことで、今まで述べられているのとは違った中国のモダニティの特徴がみえるようになる。そういう新たな研究の蓄積に至る第一歩としてここでは天安門広場をとりあげる。

天安門広場の整備過程をみると、それが「新中国」の権力の構造を中国人に教える空間構造として建設されたことがわかる。また写真を撮影する観光客の行動からそのような「教化」が観光行動のうちに無意識的に組み込まれることもわかる。

しかし、重要なポイントへの人の集中度や広場のなかでの人の流れかたを観測、観察し、広場の周囲に居住していた「土地っ子」の話を聞くと、広場より多層的な意味をも担っていることも推測できる。そういった多層的な意味の全体連関的解明は今後の課題として残されている。

1. はじめに —— 中国のモダニティにむけて

近年、人文・社会科学のさまざまな分科において、モダニティ(modernity)ないしは「近代」に関する論議がもりあがっている。これは個別専門科学の枠をこえたひろくラディカルな現象であり、この動向の全容と背景を把握するのは筆者の力にあまる。たとえば、社会学者塩原勉は、「現在、私たちは近代とは異なる質をもつ社会に向かう転換期を体験しつつある。」という現状認識の下に近代とその限界をどうみるかについての考え方を、

(1)近代は自己の欠陥を批判できる自己否定の弁証法をもっている、近代が創出した欠陥や限界を近代が創出した方法によって一掃することができるという考え方、(2)普遍的で画一的な「大きな物語」は近代とともに終焉し、それゆえ画一的な方法によって近代の限界を克服できないので、多様で異質な論争点をくぐり抜けていかなければならないという考え方、(3)人権、表現の自由などといった近代啓蒙の成果を継承し、それを踏まえ、普遍的で了解可能な合意を追求することによって、近代の限界を分節化しつつ克服するという考え方、(4)近代がみずから作り出した限界、そしてそれを克服する試みが創り出す二次的限界にたいしては、ただ疎外のない伝統に回帰し祖型を再生するほかはないという考え方に分かっている。(塩原、1994：Ⅷ)

本稿では「モダニティ」を「今、自分(たち)が生まれ生きている時代を基準として、それより前の時代から受け継がれてきた人びとの生き方／考え方にある点では根ざし、ある点ではそれと対立し、それを否定しながら、形成されてきた人びとの新しい(今の)生き方／考え方の全体」としてとらえてみたい。本稿は、一般的に言えば、「観光のまなざし」(Urry、1990=1995)を通じて「中国」のモダニティの一端を把握しようとする試みの第一歩である。また、より具体的に述べれば、流通経済大学社会学部国際観光学科1995年度北京研修において収集された天安門広場の整備過程とそこでの人びとの観光行動に関するデータのうちに、中国が主張する「新しさ」の政治性と、そのなかでの人びとの生きざまの一端をかいま見ること——それが、本稿のもくろみである。

このような本稿のスタンスは、従来の個別社会科学のみならず、伝統的な「中国研究」にたいしても論争的なものとならざるをえない。まず「観光」という「正統派の社会学者」の多くが疑い冷笑に付すか、あるいは眉をひそめて敬遠する「あぶない」対象について云々する以前に、そもそも「モダニティ」という概念は中国社会を考えるうえで果たして有効かという疑問が提起されるであろう。

伝統的な社会科学の多くの概念と同様に、modernとかmodernityとかいう概念は西歐的な概念であり、中国語の概念ではない。(それは筆者の母語であり、この論文が書かれている言語、日本語にかんしてもおなじである。)げんに、モダニティを、17世紀以降にヨーロッパに出現した社会生活や社会組織の様式と同一視する立場もある(Giddens、1990：1)そうすると、モダニティというのは、けっきょく中国社会を表面的にしかとらえられない外来概念だということにはならないだろうか。筆者自身はそうは思わないが、モダニティをめぐる現在の論議をみていると、こういう疑問がだされてもしようがないだろうと思っている。

「中国のモダニティ」がいかに不適切なやり方であつかわれてきたか——より広くいえば、「非西欧社会のモダニティ」がそうされてきたということにつながるが——をここでは3つの研究系列において、概略的に検討しておく。ここでとりあげるのは、(1)中国近現代史研究、(2)社会学的近代化論、(3)魯迅や竹内好による思想、文学面からのアプロ

一十の3つである。

(1)については、日本における近年の業績や中華人民共和国における業績の日本への紹介にかぎっても膨大な量になり、そのすべてを概観するのは門外漢である筆者のよくなしうところではない。ここでは中国史の専門家にとっては当然の前提となっている時代区分の問題をとりあげて考えてみたい。中華人民共和国の学界においても日本の学界においても、中国の前近代と近代の画期としてアヘン戦争(1840-42)を挙げ、近代と現代の画期として中華人民共和国の成立を挙げるのが通説となっているようである。本稿でもちいているモダニティ概念はこのような「近代」と「現代」を区分することなく、両者を包括するのみならず、それ以前のある種の要素まで含みうるものとして考えている。それはさておき、ここで問題としたいのは、アヘン戦争を契機として「中国の近代」が成立したという伝統的な中国史の立場である。いいかえれば、アヘン戦争の敗戦によって「中国は近代の世界に組み込まれ」(小島、丸山、1986:1)たとする立場である。このような考え方の前提は、すなわち、「近代」は「世界」(典型的には「西洋」というかたちで中国の「外」にあり、中国はそれに強制的に組み入れられるなかで、それに抵抗したり、あるいはその要素をとりいれたりしたということである。つまり、従来の中国近現代史において「近代」とは本質的に中国の外にあるものにほかならない。²⁾

次の社会学的近代化論は、1960年代以来継承されてきた枠組みである。それは単発的発展論から各地域の多様性を認めるかたちで洗練されてきている。現在、その旗手はS. アイゼンスタット(Eisenstadt)であるといえよう。

アイゼンスタット(1987)は、モダニティをヨーロッパに始まり全世界的に拡散しつつある新しい型の「文明」(civilization)としてとらえる。彼を中心とした共同シンポジウムの記録『モダニティの様式』においては、そのような「文明」の世界的拡散過程を「西欧」、そして「西欧を超えて」というかたちで区別してとらえようとしている。しかし、アイゼンスタットの同僚で、ロシアと中国の近代化を論じた Ofer は、中国の近代化の型を「ソビエト型」(彼は1949年以降に焦点をしぼる)としつつも、「その近代化への途はまだはっきり定まっていない」(Ofer, 1987: 62)というあいまいな結論を導くにとどまっている。また富永健一(1996: 401-402)は構造-機能-変動理論ないしはネオ社会進化論における「社会進化の5つの方向性」(「核家族化と親族集団の解体」「組織の形成」「地域共同体の解体と地域社会の拡大」「社会階層の平準化」「国民社会と国民国家の形成」)にあてはめて、中国の近代化過程を説明しようとするため、その論議は重要な歴史的事実を無視した、一面的なものにならざるをえない。³⁾

以上、検討したような「正統派」の歴史研究や社会学的近代化論とはかなり異なった立場から、「中国の近代」という問題にアプローチしようとした研究系列が存在する。(あるいは「存在した」というべきか。) 魯迅とその問題意識を自分なりに咀嚼しようとした竹内好の思索の歩みがそれである。魯迅が「燈下漫筆」において、中国史を「ドレイに

なろうと思ってもなれぬ時代」と「しばらく無事にドレイになれる時代」の交代として表現したことは有名である。魯迅にとって「中国の近代」、「新しい時代」というものがもしありうるとすれば、それはこのような時代のサイクルからの脱出として構想されるものであったろう。竹内は「燈下漫筆」のこの一節を引きつつ、「中国の近代と日本の近代」のなかで次のように書いた。「ヨーロッパが、その生産様式と、社会制度と、それに伴う人間の意識とを、東洋に持ち込んだときに、今までなかった新しいものが東洋に生まれた」「ヨーロッパがどう受け取ったにせよ、東洋における抵抗は持続していた。抵抗を通じて、東洋は自己を近代化した。抵抗の歴史は近代化の歴史であり、抵抗をへない近代化への道はなかった。」(竹内、1948=1993: 12、17)

2. 観光対象と観光行動からの「中国のモダニティ」へのアプローチ

冒頭でも述べたように「観光のまなざし」を通じ、言い換えれば観光対象と観光行動という、伝統的な中国研究とは異なった観点から中国近現代史上の重要な場所をあつかうことで、今まで言われているのとは違った、中国のモダニティの特徴がみえるようになる。

中国を直接の対象とするものではないが、このような方法論で——観光を通じて——モダニティを見るという実践としては、すでにいくつかの研究例がある。たとえば、人類学者 Rabinow(1992)は、みずからのブラジル滞在の記録を、touristの目を通じて(人類学で言う、伝統的な意味での「フィールドワーカー」としてではなく)ブラジルにおける‘classical, modern, postmodern’の問題を解こうとする実践として報告している。⁴⁾ また Shields(1991)は「モダニティのもうひとつの地理学」を構想し、イギリスの代表的海水浴場ブライトンや、ナイアガラ滝がどのような社会史的過程を通じて観光地としてのイメージを確立してゆくかを論じている。

このような「観光を通じてモダニティを見る」という見方にてらせば、第1節で検討した従来の3つの研究系列における「中国のモダニティ」の見方は、それぞれの問題点を内包している。

中国近現代史研究は、「近代」(modern)は中国の外にあるという前提をおいている。社会学的近代化論は、中国のモダニティないし近代化の「型」を明確に把握できない。魯迅や竹内好は、これらの問題点を克服しようとしている。すなわち、彼らにとって「中国の近代」はとりもなおさず、中国人にとって内発的、内在的なものでなければならず、竹内の課題は、そのような中国の「内在的な」近代化の「型」を、「外発的な」日本の近代化の「型」とは明確に異なる「型」として提示することにあつたのだから。このような彼らの問題意識のある点は今日なお継承しなければならないと筆者は考える。しかし、彼らの論説の限界は、モダニティが具体的にどのような「かたち」で人びとのくらしの

中にあらわれているか、具体的な「かたち」をとってあらわれるモダニティの「ふわふわ」した側面がおさえられていない点にある。⁵⁾

これらの先行研究にたいし、本稿のアプローチは、中国における特定の観光対象の「歴史」と人びとの観光行動から中国のモダニティをみようとするものである。では、観光を通じて「中国のモダニティ」をみることの利点はどこにあるのか。

ここでは、「観光」(tourism, mass tourism)の定義をめぐって、従来、日本観光学会を中心に積み重ねられてきた論議の軌跡をあらためて検討する準備も余裕もない。⁶⁾ 本稿の分析目的にてらし、ここでは「観光」を、「ふだんの生活の場所から離れて移動している(旅行している)人びとに与えられる経験の総体」として、また「観光行動」(tourist behavior, mass tourist behavior)を「ふだんの生活の場所から離れて移動している(旅行している)人びとがその間にとる行動の総体」として規定することとしたい。

ある観光対象を開発する人は、そこを訪れる人びとに特定の「観光」(個人的な幅はあるが)を与えようと意図するであろう。とすれば、開発された観光対象が中国の「いま」を示すものとして意図的に構成されている場合、その構成を分析することで、そこを開発した主体が「中国の『いま』(＝モダニティ)がどのようなものであると、そこを訪れる人たちに見せたがっているか」はわかる。

また、ある観光対象をおとずれる人びとの観光行動を分析すれば、人びとがそこを「ふつうに観光する」ことで、どの程度、そこを開発した主体が「見せよう」と思ったとおりに「見せられて」いるかを明らかにすることはできるだろう。

つまり、観光を通じて分析できる中国のモダニティは、いわば「見せるためのモダニティ」であるが、①そうであるだけそれは「中国そのものの(中国の中にある)モダニティ」として構成されるだろう。②それは「中国的なもの」として構成され、その独自の「型」を強く打ち出すだろう。③知識人向けに論理的に構成されるのではなく、大衆の情緒を通じて経験され、情緒に訴えざるをえないため、矛盾した、雑多な、「ふわふわした」ものとなりやすい。

それにしても、なぜ研究対象として選択されるのが「天安門広場」であるべきなのか。このような研究枠組みにおいては「中国のホテル」や「遊園地(テーマパーク)」よりも天安門広場がなぜ適切となるのか。ホテルや遊園地もまた観光対象であり、天安門広場とはかなり異なったかたちで中国のモダニティの一端を表象している。したがって、本稿の副題に示した「観光を通じてみる中国のモダニティ」という課題を本格的に追求するためには、多様な観光対象を分析する事例研究の積み重ねがなされねばならないだろう。

しかし、現段階、すなわち研究の端緒的段階での予想として言えることは、「ホテル」なり「遊園地」なりは、観光対象としてより複雑であり、混合的な存在だということである。それらにおいては「歴史性」の語り、そこを訪れる者への「教化」が、「顧客の効

用」に従属させられ、それと複雑にからみあったかたちで存在している。これに対して、天安門広場は象徴としての純化をめざして構成された（実際にそうになっているかは後に検討する）、おしゃべりな、自らについて語る観光対象だと言える。天安門広場を分析する者は、その象徴としての「語り」がどのようなかたちで空間化されており、それにしただって観光客の行動がいかにかたち化されるかという点に注意を集中すれば、そこに顕現するモダニティに比較的容易に接近することができるのである。

3. 天安門広場の整備過程——北京のあらたな東—西軸

中国の王城における宮廷広場の起源は、王城の大門外にみられる「千歩廊」に見出すことができる。たとえば元の大都はそのような例である(図1参照)。しかし、その左右に中央執務所がおかれた千歩廊に加えて、王城の大門外の東西に長い空間が確保され、T字型の宮廷広場がはっきりと形成されるのは、明代永楽年間(15世紀初め)のことである。ただ、この時期の宮廷広場は四方を壁でとぎし、東西の長安左門、長安右門を通じて出入りするものであった。この宮廷広場では頒詔、科挙の最終試験の結果発表などが行われた。(図2参照)

また中国の伝統的都市は、周礼にさだめられたとおり、都市の南北に中心線を有する。周知のとおり、唐の長安城はこのような南—北方向の軸とそれに平行にはしる道路建物、それにそれに直行する東西方向の直線道路によって街を碁盤目に108の区画(条坊)に区切った。しかし、明代、宮廷広場が形成された時期の北京には、広場と紫禁城の内部を南—北に通過する軸のみが強調されており、それと直交する東—北軸ははっきりとは形成されていなかった。また中華民国時代(1947年)の北京地図で確認しても広場は依然として左門、右門で閉ざされた閉鎖区域であり、都市空間秩序に根本的な変化は生じていないとみてよい。(図3参照)

朱自煊(1994: 36-38)は、1949年、新中国の成立以降、1980年に至るまでの北京の都市計画を第1期(1950-57年。マスタープランの策定)、第2期(1958-66年。大躍進運動とその後の調整期の都市建設)、第3期(文化大革命とそれ以降の都市計画)に分かっている。

天安門広場とその周辺の変化はすでに朱自煊が言う第1期に始まっている。長安街が東西に貫通させられたのがそれである。しかし、より大きく本格的な変化は第2期に生じた。天安門広場は、1959年、建国10周年の慶典行事を迎えるにあたり、100万人を収容するために40ヘクタールに拡張された。1958年4月、広場の中央やや北寄りに、中国革命のなかで戦い死んだ人びとを追悼する人民英雄記念碑が建てられ、1959年、広場の東側に中国革命博物館と中国歴史博物館、西側に人民大会堂が建設された。また長安街も80メートルに幅がひろげられ、天安門の区間は120メートルの幅にされた。(図4参照)

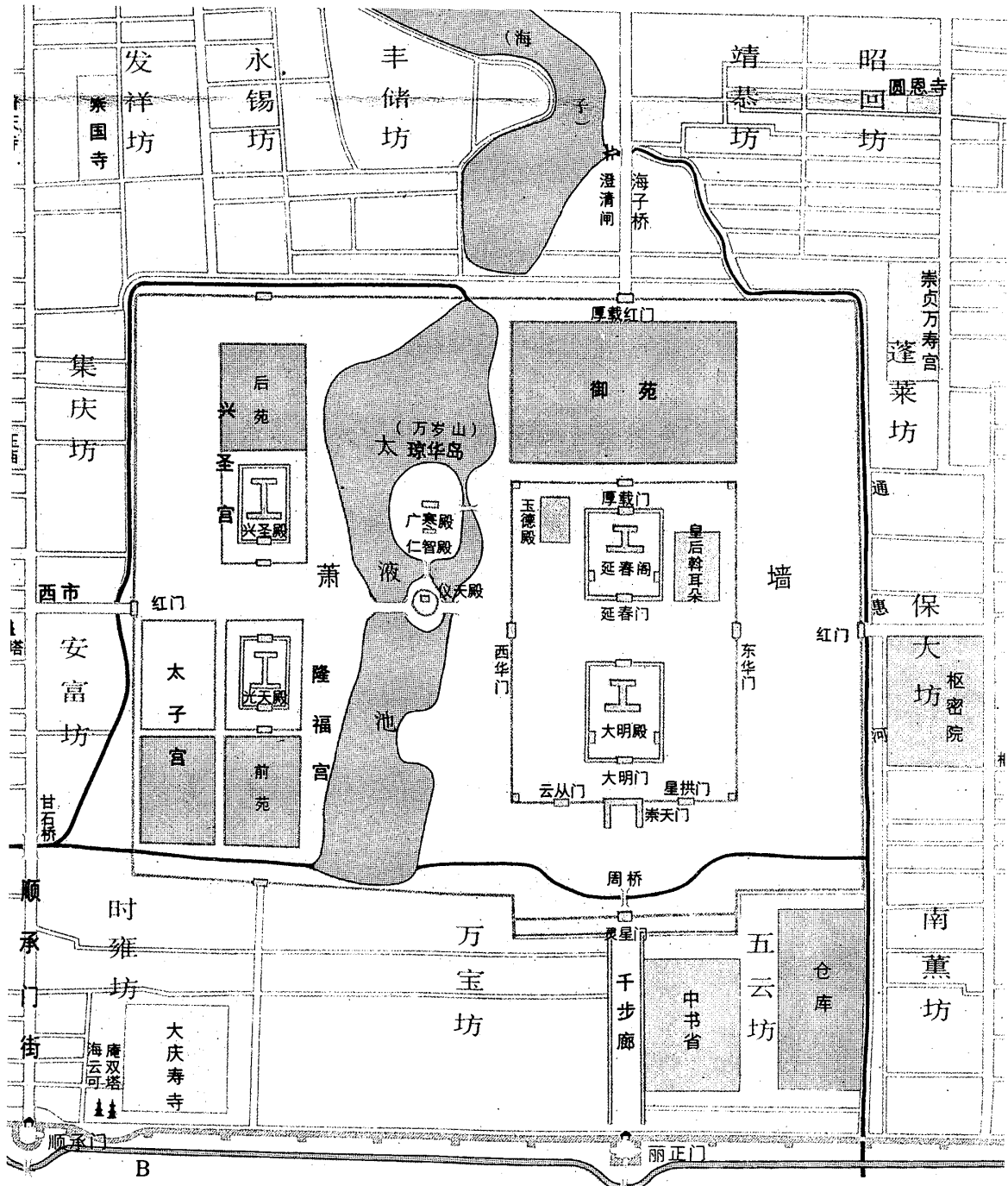


図1 元の大都の王城と「千歩廊」(出典 侯仁之 (1988))

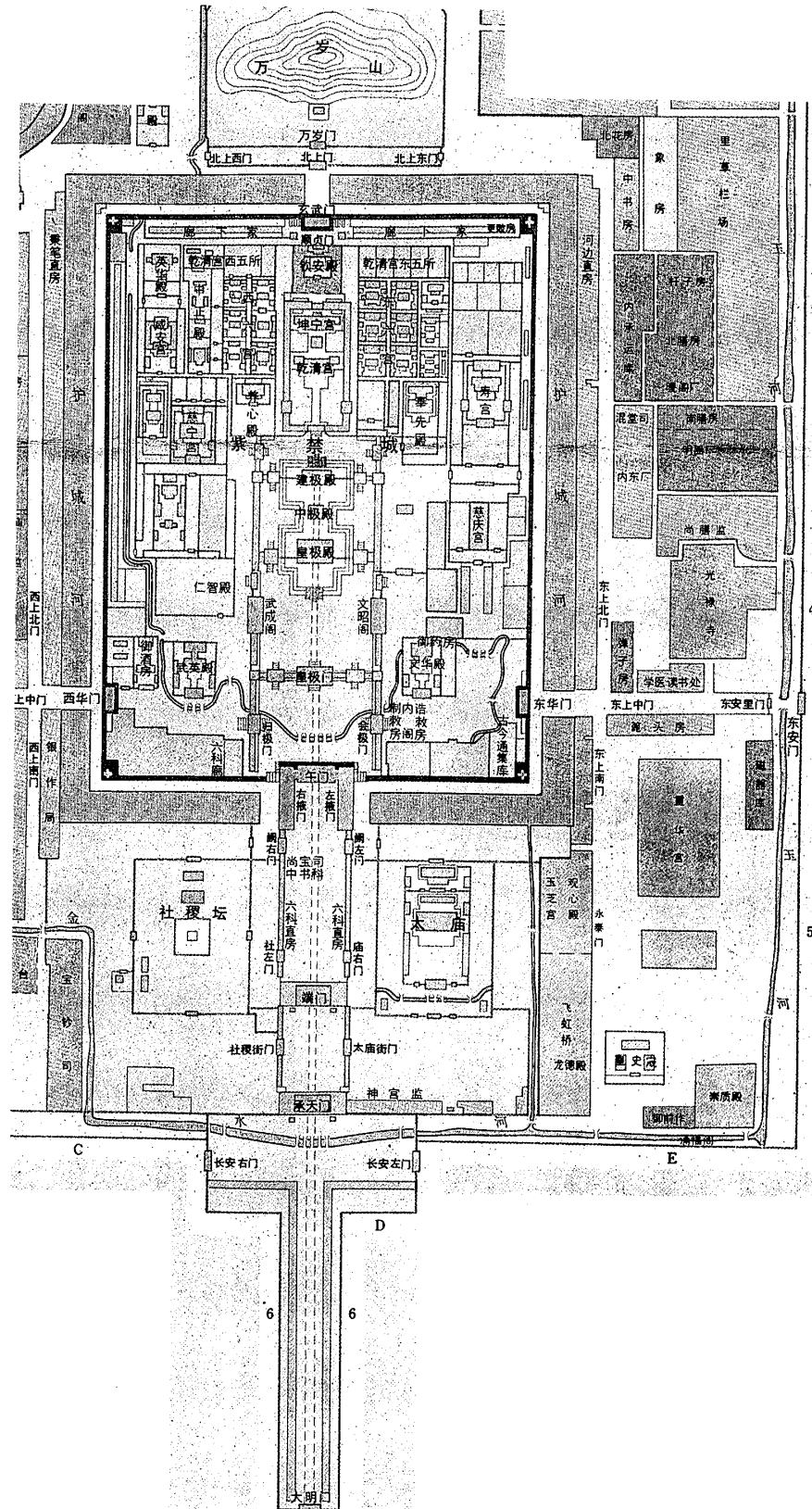


図2 明代永楽年間の王城と広場（出典 侯仁之（1988））

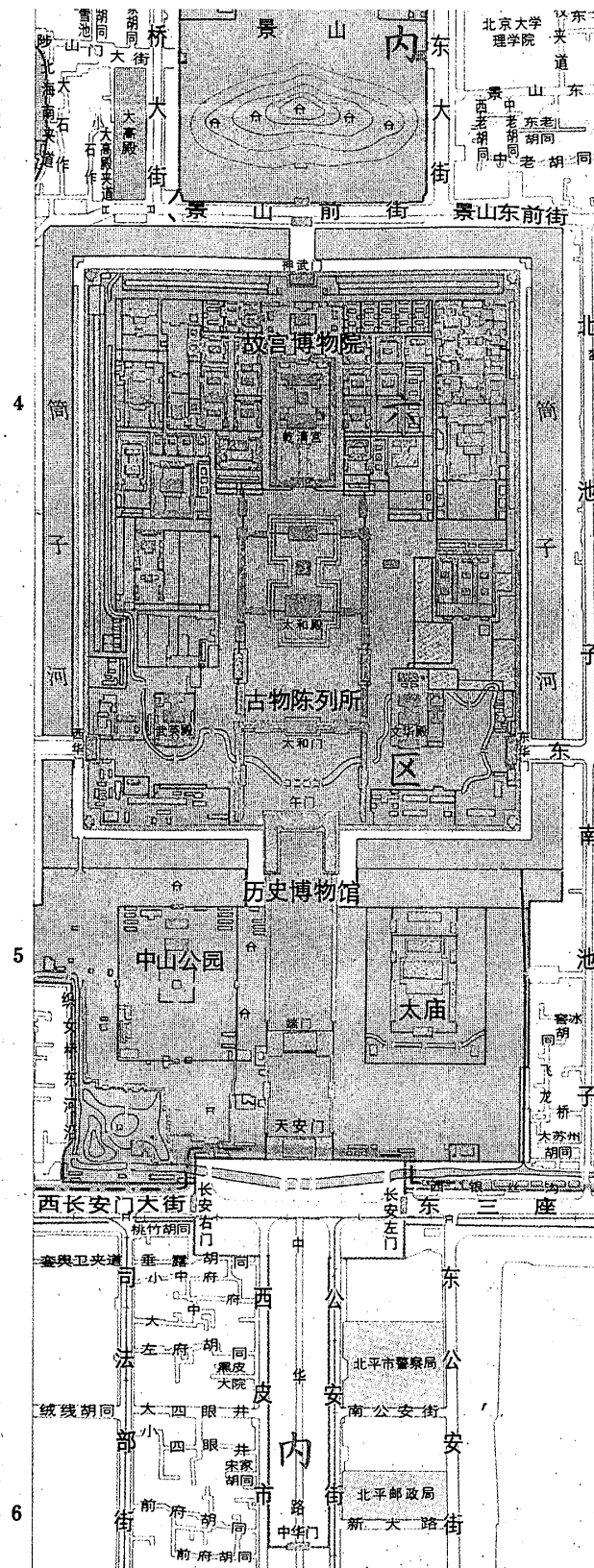


図3 中華民国期の故宮と広場 (出典 侯仁之 (1988))

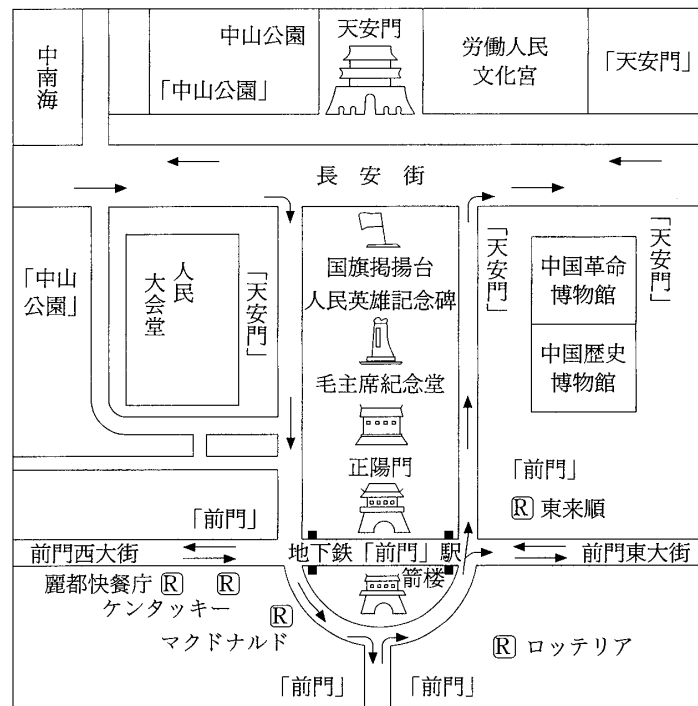


図4 現在の天安門広場

朱自煊 (1994: 37)はこのような整備過程の意義について、

「もともと北京旧城には南北の中軸線しかなく、都市の中心はあくまで紫禁城であったが、東西方向の長安街や天安門広場が拡張されたため、それがやや南の天安門まで移った。この変化は都市の性質の変化と都市の象徴の移転を現していた。」

と書いている。共産党中央委員会(党中央)、國務院、北京市政府によって決定された「北京城市建設総体規則方案(簡本)」(1984→1989: 583)の次のような表現はより直接的でわかりやすい。

「(北京の)旧市街地は党中央、全国人民代表大会常任委員会、國務院など首脳機関の所在地である。全国の人民があこがれるところであり、国際的な人士が注目するところである。計画を定めるにあたって、もともと存在した南―北線を保存、発展させたうえで、東西に長安街を建設、展開、延長した。新しい東西の中軸線を形成したのである。二つの軸線は天安門広場で交わる。天安門広場は数回にわたる改建を経て、首都の人民大衆が活動する中心的な広場となった。故宮を中心とし、封建時代の帝王を体現する唯我独尊的な性格を持った旧市街地は改変されたのである。」

つまり、天安門広場の建設と長安街の拡張は北京の伝統的な南―北軸に直交する東―西軸の確立を意味したのである。南―北軸線が、故宮＝紫禁城を中心とする伝統的な王都北京の都市秩序の継承を意味するものであるのに対して、東―西軸はそれと対抗し、それを包摂しつつそれに意味を再付与する、社会主義的―人民中国の新たな空間秩序を

象徴する軸ということになる。東－西の軸線上にあらたに構成された歴史(歴史博物館)と革命(革命博物館)のモニュメント、さらに人民的意思決定機構(人民大会堂)が配置されたのはこのようなゆえんであろう。この南－北、東－西の両軸は正確には天安門外でまじわる。さらに南－北軸は広場の中心を通過し、広場は両軸の無数の平行線からなる正方形の石畳で区切られた場所となる。

図4で示すように現在の天安門－天安門広場は長安街をはさんで天安門の左右に労働人民文化宮、中山公園が位置し、前述したように広場の東には革命博物館、歴史博物館、西側に人民大会堂が位置する。広場内部には北から、1949年の建国以来国旗が掲げられている国旗掲揚台、人民英雄紀念碑、1977年に完成した毛主席紀念館の順でモニュメントがならぶ。いいかえれば、伝統的な南－北軸の「北」には依然として故宮(かつての紫禁城)が位置するわけであるが、「南」には「人民英雄」「毛主席」というあらたな象徴が配置されることになる。このような象徴配置の含意は両義的であり、まさに中国のモダニティが内包する矛盾に直結する。また広場の南端には北京内城を囲む城壁の9つの門のひとつであった正陽門が位置する。

あらたに建設された毛主席紀念館は、図4があたえるイメージ以上に、現在の広場の空間秩序に大きな影響をあたえており、紀念館の北と南で人の流れの様相は一変する。この点は第5節であらためてふれることにする。

4. 観光写真の政治学——「四景十元」

今回の現地調査に先立つゼミの打ち合わせで『地球の歩き方・北京』に出てくる天安門広場の写真(写真1参照)を見ながら、その広さと人の多さに圧倒され、いったいこの場所にどうやってアプローチしたものか途方に暮れていたところ、ある学生が「先生、このへん(写真矢印)に点みたいなのが並んでいますけど、これはなんなんでしょうね。」と言いだした。中国経験のまったくない筆者にはもとより答えようがなく、根橋正一助教授に質問したところ「たぶん、写真屋のパラソルでしょう。」と教えてくださった。なんでまたパラソルがいるのかと問うにふい筆者に、根橋先生は、さえぎるものがない広場の直射日光と輻射熱のことをしんぼう強く説明してくださったが、それは今回、8月に現地をふんで実感することになった。

第3節で述べたとおり、天安門広場はT字型の広場であるが、写真屋のパラソルはそのTの縦棒と横棒がまじわったあたりの、広場の北部に集中している。すなわち人民英雄紀念碑より北側、人民大会堂と中国歴史博物館、中国革命博物館にはさまれたあたりである。より南側、いいかえれば人民英雄紀念碑と毛主席紀念館のあいだや、毛主席紀念館の南、正陽門の北にもいくつかのパラソルはあるが、広場の北側に比べると数も少なく、95年8月27日午後に筆者が観察した限りでは、客の入りも広場の北側のパラソル



写真1 天安門から見た天安門広場と写真屋の parasol (矢印)
(出典 ダイアモンド社 (1995))

に比べるとがいして悪いようだった。そして『地球の歩き方』の写真に見られた通り、広場の北端、長安街の近くには道路と並行するような向き、東西に parasol が一列に並んでいる。

このような parasol の下には白塗りのボックスがおかれ、そこに一人か二人の写真屋のおじさんが座っている。ボックスには「国営**照相」というように書かれている。この日、広場で確認できた parasol の写真屋さんはすべて「国営」だった。ガイドの徐東明さんの説明によれば、このような写真屋さんは国営の会社(**照相)に売上のなかから決まった額を納入し、残ったものを自分の収入にしているとのこと。

また、そのボックスの横には、他の観光地における写真屋と同様に見本の写真が立ててあり、そこに「四景十元」と書かれている。その重要性については後述する。

筆者は通訳ガイドをしてくれた徐さんにこの写真屋さんにごく簡単なインタビューをしたい、インタビューに応じてくれたら自分も客になって写真をとるからと申し出、彼を介して次のようなインタビューを行った。

—最近、お客さんは多いですか。

1996.10 [13]

社会学部論叢 第7巻第1号



「あまり多くない。」

—どうして？

「この時期は学生が少ないからね。」⁷⁾

—外国人は写真屋さんにどれくらい来ますか。

「非常に少ない。」

—この「四景十元」という写真、ここで撮ってすぐに受け取れるんですか。

「現像に1時間待ってもらわないと。できあがった写真をあそこ（革命博物館横を指す）で渡します。この場で渡せるポラロイド写真もやっている。外国人はポラロイドを頼むほうが多い。」

—この「四景十元」という組合わせ、面白いんですが、4枚1セットでバラ売りはしないんですか。広場のこの位置だとこういう形で「四景」がとれるかもしれませんが、たとえば毛主席紀念館の向こう側にある写真屋さんはどうしているのでしょうか。

「セットのみでバラ売りはしない。あちら（広場の南側）のほうでも四景十元はやっているが、四景の組合わせがちがう。」

—中国人の客層というと。

「休みのあいだは圧倒的に学生だ。それから地方からの人。地方からの人はカメラを持っていないことが多いからね。」

—でも、今まわりを見ても自分で写真をとっている人がけっこう多いですね。たぶん地方から来た人たちが多いと思うんですが。

「カメラは持っていては質が良くない。一生の記念だからせめていい写真をと私たちに頼む人も多いんじゃないか。私たちが使うのはヤシカのよいカメラ（見せてくれた。）中国製のカメラでは色があざやかに出ない。」

—地方からのお客さんに少数民族もいますか。

「ああ、多い。」

—どんな民族が多いですか。

「まずウイグル族、それからモンゴル族、朝鮮族…」

—なぜそういう民族が多いんでしょうか。

「ウイグルやモンゴルは人口自体が多いからね。」⁸⁾

—漢族と見分けがつかますか。

「ウイグルやモンゴルは民族衣裳を着ているからすぐわかる」（「朝鮮族は洋服を着ているけど、よく見るとちがうってわかりますよ」とこれは通訳の徐さんの意見）

—おじさんはここで写真をとりはじめてどれくらいになるんですか。

「私は約30年。彼が（と横にいる相棒を指して）20年ぐらい。」

—この30年間で一番変わったことというとなんかことでしょうか。

「自分のカメラを持っている人が多くなった。これからの写真屋はむずかしい。」

—この写真、地方に郵送してもらえるんでしょうか。

「住所を書いてもらえば郵送できる。郵送料が十二元かかる。」

以上、再現してみればわかるように焦点が定まらない「世間話」に過ぎない。このインタビューの段階では筆者の関心は天安門広場を流れてゆく群集の社会的・エスニック的構成に向いており、「四景十元」について問うていながらその政治性をまだあまりはつきりとは自覚していなかった。

インタビューを終え、では実際に写真をとってもらおうということになった。インタビューに答えてくれたおじさんは、もう一人の「20年ぐらい」やっているという40代ぐらいの写真屋さんに指示し、私は所持品を徐さんにあずけ、おじさんの手まねきにしたがって彼について行った。おじさんはパラソルから10メートル離れたあたりで私を止め、手ぶりで天安門と国旗掲揚台をバックにして立つように指示した。

私が——自分がそれまで経験していたスナップ写真をとってもらうように——天安門を背にし、広場の石畳の南北線をまたぐようにしておじさんに正対して立ったところ、

おじさんは石畳の南北線に向けて自分の足が平行になるように立ち、顔だけを私のほうへ向けて上半身が半身になるように体をねじってみせた。ここで私はなぐられたような衝撃を受けて「ああ、そうか」と思いつつ、写真をとってもらった。とりおわるとおじさんは、私に左手のほうに移動するように手ぶりで指示した。このようにして、私はおじさんのまわりを北→西→南→東の順にまわり、それぞれ(1)天安門と国旗掲揚台、(2)人民大会堂、(3)人民英雄紀念碑と毛主席紀念館、(4)中国歴史博物館をバックに4枚の写真(写真2-5参照)をとってもらった。

撮影をすませた後、徐さんに写真屋に来るお客さんには外国人は少ないというわけを確認したところ、「外国人は現像ができるまで1時間も天安門広場で待てないのでだいたい自分でとるのだろう。中国人だったらまわりで1時間ぐらいぶらぶらしてから写真をとりに来てもよいだろうけど」という返事だった。

食事をすませ、広場の周辺を徐さんに案内してもらった後、午後3時ごろ、歴史博物館の入口横にある北方照相の写真受け渡し所に写真を受取りに行った。ちょうど一人の女性が窓口で口論しており、徐さんにたずねたところ「1時半にとって40分でできると言ったのに、まだできていない!」と抗議しているとのことだった。

写真は封筒に入れて渡され封筒には油紙がはられて鉛筆で「日本朋友 請快一点」(日本のお客さん。すこし急いでください)と走り書きされていた。

「四景十元」の写真から読み取れるのは、人びとに写真をとらせ、その構図を固定させる力の存在である。天安門広場のスペースのなかで公安警察の注意を引きつけない行動は基本的に3つしかない。どこかに向けて歩くか、列について並ぶか(毛主席紀念館などへの入場のため)、止っている者は写真をとるかである。(他にはしいていえば名物になったたこあげと腰をおろしてへたりこむことであろうか)。そして写真をとる場合、その構図は決まってくる。自らカメラを持ってスナップ写真をとっている観光客たちも——中国人であろうと、この場の歴史について基本的な知識さえ欠く外国人であろうと——公認された「四景十元」の構図をとらざるをえないのである。私が写真をとってもらった広場の北側でシャッターを切るかぎり、天安門とその中央の毛沢東の写真、さらにそれと重ならないようにして立つ五星紅旗、人民英雄紀念碑と毛主席紀念館、人民大会堂、革命博物館などは写真の構図にはいらざるをえない。

さらに北方照相のカメラマンの指示とそれに従ってとられた記念写真は、それを見る者にこれらの建造物がたんなる背景ではないことを示す。被写体の人物はそれらのモニュメントを背景として、それらに完全に背を向けて立つことは許されない。その人は、天安門広場がそれによって構成される北京の南—北軸、東—西軸に引かれた広場の敷石の直線を遮ることなく、モニュメントに向けて半身で立たせられる。被写体の身体はできるかぎり建造物も、また南—北、東—西の軸線の平行線をも隠すことなく利用される。いわばその人の身体は、建造物が示している軸と垂直にまじわるもうひとつの軸の代替

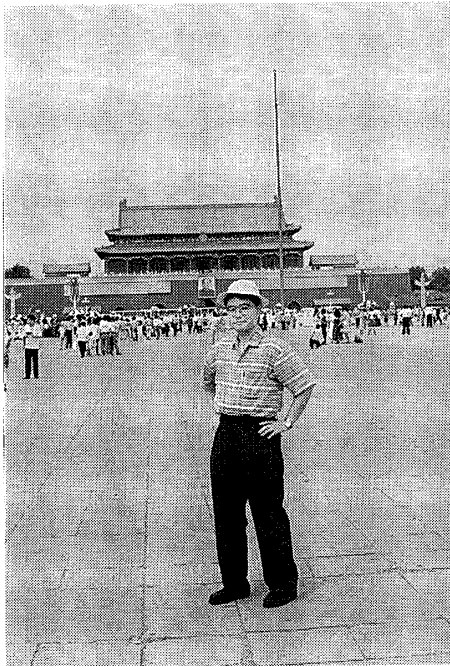


写真2 天安門と国旗掲揚台（北側）



写真3 中国歴史博物館（東側）



写真4 人民英雄紀念碑と毛主席紀念堂（南側）



写真5 人民大会堂（西側）

「四景十元」の組写真

物として喩化され、建造物によって示される軸と広場をおとずれた観光客の身体の向きによって示される軸の写真図像中央でのまじわりのうちに、天安門広場の基本構想と空間秩序は観光写真をつうじてたえず再生産されるのである。

5. 広場の多義性——天安門は「中心」か？

しかし、このようなヘゲモニックな空間秩序はけっして単一的で決定的なものではなく、ゆらぎと多層性をふくんでいる。それを(1)人の集中度、(2)人の流れかた、(3)「土地っ子」の広場観という3点について指摘しておく。

(1) 人の集中度

大畑ゼミ「天安門」班は、天安門広場とその周辺における(1)故宮への入口(端門)、(2)中山公園への広場側からの入口、(3)労働人民文化宮への広場側からの入口、(4)天安門、(5)歴史博物館、(6)人民大会堂、(7)毛主席紀念館、(8)正陽門という8ポイントを決め、1995年8月27日(日)、13時半から16時40分のあいだ、30分おきに10分間ずつ、それらの8ポイントにおける入場者／正面からの写真撮影者数を(A)「黄色人」(B)「白人、黒人」(C)分類不能に分けて計測した。その結果が表1である。⁹⁾

調査方法の不備、調査時間の短さ、中国の他の観光地における同種の比較可能なデータが入手できなかったため、このデータから確定的なことはいえない。だが、参考までに、われわれが日本における象徴的観光地として天安門広場に比しうるのは考えた皇居前広場でおこなった、同様の人の集中度調査の結果をあげておこう。(表2参照)¹⁰⁾

両方の表をまずエスニシティ構成という面から検討すると、天安門広場は皇居前広場に比べて、一見同質的にみえる「黄色人」(われわれ自身もそのうちの何人かであった)によってより占められている空間であることが推測しうる。しかし、このデータの含意はそれにとどまるものではない。このデータはそれに加え、天安門広場がそれを構成する各モニュメントによって、皇居前広場に比してはるかに人びとの行動を分散させること、人びとの行動をみるかぎりにおいて、天安門は、皇居前広場で二重橋が示すような、ゆるぎない中心性を示してはいないことを確認させてくれるのである。

われわれが計測した時間帯において天安門にのぼる人の数は故宮への入場者へくらべてかなり少ないのは勿論、中山公園や労働人民文化宮への入場者にくらべてさえ比較する時間帯によって多少のちがいはあるが、がいして少ないか、せいぜい同じ水準である。¹¹⁾ 天安門にのぼることによって、観光客はいわば「毛沢東のまなざしで」広大な広場、新中国によって形成された北京の東—西軸を見おろすことができ、門上では「終生紀念」とするために十円で天安門登上証明書が売られているにもかかわらずである。また調査時点において革命博物館は改修のため長期閉館しており、人民大会堂は調査当日

表1 天安門広場周辺の施設への入場者または写真撮影者 (1995年8月27日)

時刻	場所 分類	故宮入口	中山公園入口	労働人民文化宮入口	天安門	歴史博物館	人民大会堂	毛主席紀念館	正陽門
13:30	「黄色」	259(99)	—	327(99)	—	—	27**	16(89)**	—
—	「白黒」	2(1)	—	4(1)	—	—	0**	2(11)**	—
13:40	不明	0(0)	—	0(0)	—	—	0**	0(0)**	—
	計	261	—	331	—	—	27**	18**	—
14:00	「黄色」	—	355	—	158	30(94)	—	—	30(97)
—	「白黒」	—	0	—	0	2(6)	—	—	0(0)
14:10	不明	—	0	—	0	0(0)	—	—	1(3)
	計	—	355	—	158	32	—	—	31
14:30	「黄色」	351(96)	—	245	—	—	0*	67(96)**	—
—	「白黒」	16(4)	—	1	—	—	0*	3(4)**	—
14:40	不明	0(0)	—	0	—	—	0*	0(0)**	—
	計	367	—	246	—	—	0*	70**	—
15:00	「黄色」	—	196(97)	—	124	49(96)	—	—	28
—	「白黒」	—	7(3)	—	0	2(4)	—	—	0
15:10	不明	—	0(0)	—	0	0(0)	—	—	0
	計	—	203	—	124	51	—	—	28
15:30	「黄色」	444(98)	—	138(96)	—	—	0*	17(77)**	—
—	「白黒」	6(1)	—	6(4)	—	—	0*	5(23)**	—
15:40	不明	1(0)	—	0(0)	—	—	0*	0(0)**	—
	計	451	—	144	—	—	0*	22**	—
16:00	「黄色」	—	160(98)	—	98(96)	0*	—	—	42
—	「白黒」	—	3(2)	—	4(4)	0*	—	—	0
16:10	不明	—	0(0)	—	0(0)	0*	—	—	0
	計	—	163	—	102	0*	—	—	42
16:30	「黄色」	190(94)	—	156	154(98)	—	30(97)**	26(93)**	—
—	「白黒」	13(6)	—	0	2(1)	—	1(3)**	2(7)**	—
16:40	不明	0(0)	—	0	1(1)	—	0(0)**	0(0)**	—
	計	203	—	156	157	—	31**	28**	—

・()内はパーセント。

・天安門、正陽門については門上にのぼった人の数。

*この時間帯は閉館または一般人立入禁止

**広場側正面から建物を写真撮影した人の数(ビデオを含む)

表2 皇居前広場への入場者または写真撮影者 (1995年11月11日)

時 刻	場 所 分類	二重橋前	楠正成 像前	南側入口	東側入口	北側入口
13:30	「外国」	25(49)	1(25)	21(50)	8(22)	0
—	その他	26(44)	3(75)	21(50)	29(78)	28
13:40	計	51	4	42	37	28
14:00	「外国」	9(39)	0	26(37)	7(13)	12(15)
—	その他	14(61)	5	44(63)	46(87)	70(85)
14:10	計	23	5	70	53	82
14:30	「外国」	19(32)	2(17)	0	31(35)	7(10)
—	その他	41(69)	10(83)	8	58(65)	64(90)
14:40	計	60	12	8	89	71
15:00	「外国」	11(44)	0	0	0	15(25)
—	その他	14(56)	16	20	31	45(75)
15:10	計	25	16	20	31	60
15:30	「外国」	0	0	0	2(3)	5(13)
—	その他	58	4	15	61(96)	34(87)
15:40	計	58	4	15	63	39

- ・「外国」—肌の色（黒・白）および／または日本語以外の言葉を話している人
- ・二重橋、楠像の数値は目標に向けて写真を撮った人の数（ビデオを含む）
- ・各入口の数値は広場への入場者数
- ・（ ）内はパーセント

の午後になって一般人の立ち入りがとめられた。このため歴史博物館への入場者のデータを得られたのみであるが、ここへの入場者も予想どおり故宮への入場者にくらべれば非常にすくない。

天安門、歴史博物館への入場者数が故宮への入場者数に比してすくないのは、新たに形成された東—西軸が伝統的な南—北軸に比べて弱いというかたちで本稿前節までの枠組みにてらしても解釈しうるかもしれない。しかし、中山公園や労働人民文化宮への入場者はどうか？日本の観光ガイドブックではあまりくわしくふれられてはいないが、かつての社稷壇であると同時に、孫文を記念した中山公園の内部には現在、子ども用の乗り物が作られて小遊園地ようになっており、かつての太廟である労働人民文化宮では週末に市民向けのさまざまな催し物がおこなわれているという。伝統的な南—北軸、社

会主義的モダニティを示す東－西軸といういわば「大状況論」では切れない中国の人のびとのさまざまな志向性がこの場所の周囲にあらわれているのだと思われる。

(2) 人の流れかた

第4節で述べたように毛主席紀念館の存在は広場での人の流れに大きな影響を与えている。典型的に正陽門横にある地下鉄「前門」駅でおりた観光客の場合を考えてみよう。彼または彼女の前にまず手近な目標として毛主席紀念館の背面が見える。そこをめざして歩き、さらに紀念館の横の並木が植えられている「通路」(広場の通路状の部分)を歩む人たちは、そのような空間構成に規定され「自然に」北向きに見物にむかう、見物を終えて駅へむかう双方向的な南北の「流れ」を形成するようだ。

だが、このような「秩序」は紀念館を過ぎ、人民英雄紀念碑をまのあたりにする広場中央部に出ると一変してしまう。天安門上から撮影したビデオの映像(写真6参照)が示すように、そのような単純な流れでは把握しえない。広場をタテ方向に動く人、ヨコ方向に動く人、ナナメ方向に動く人からなる複雑な、いわば「分子運動」が現出するのだ。

広場における人の動きの総体的把握は95年度の中国研修ではなしえず、その方法論も含めて今後の課題ということになる。¹²⁾ 単純な観察結果にもとづく限り、北京の南－北軸や東－西軸の意識が、広場中央部における人の動きを規定しているようにはみえない。¹³⁾ このような複雑な動きが存在する直接的な理由としてはそれを許す広場空間の広大さとそこに配置された複数のモニュメント、さらに広場の外側から広場への入口／出口、具体的には広場とその外側の歩道を結ぶ地下道／横断歩道が複数あることがあげられよう。



写真6 広場中央を縦横斜めに移動する人々

皇居前広場と対比するならば、観光バス(ハトバス)や地下鉄をおりたあとで玉砂利(天安門広場にはしかれていない)のうえを二重橋へと向かう「列」の感覚は、天安門広場中央では感得不能となる。天安門広場における平時の人の流れを、国慶節など儀礼時の人の流れ、第2次天安門事件など運動時の人の流れと対比しつつ、広場における人的運動の秩序を総合的に把握することも今後に残された課題である。

(3)「土地っ子」の広場

中国研修ではじめて天安門広場をおとずれた時、何人かの学生と炎天下の広場を横切りつつ、広場についての感想を話し合っていた。日本人学生の感想は「とにかく広い!」というものがほとんどだったが、横にたまたま中崎ゼミの中国人留学生Cさんがいた。彼女の実家は北京の町中だということは知っていたので、私は「Cさんも中学や高校のころ、ここによく遊びにきたのかね。」とたずねた。すると彼女は「ええ、夜はよく来ました。」と答えてくれた。「え、夜?」と聞き返すと、彼女は、だいたい昼間の私たちがいたような時間帯に天安門広場を歩いているのはほとんど地方からの観光客だと思う、自分が思い出すのは、こういう夏の暑い季節、大人は仕事が終わって、子供は学校が終わった夕方から夕涼みに天安門広場に集まり、風通しのよいところに座って四方山話をしたことだ、というように教えてくれた。

初体験の広場の警戒のもののしさにいささか閉口していた私は、「へえ、夜でもこの場所には入れるの。」と言うと「もちろんですよ。」「何時ごろまで夕涼みの人たちはいるのかな。」には「午後12時くらいまでいることもありますよ。」という返事だった。

夜の天安門広場!それは日本で調査設計をしていた時のわれわれの構想をまったく超えていた。われわれにとって、そこはあくまで故宮への入口、午後5時くらいまで門の上にも登れ、記念館、博物館なども見学できる「観光地」であった。観光施設が閉ざされる午後5時以降のことは念頭になく、したがって調査日程にもいれていなかった。

夕暮れる広場の五星紅旗はおろされ、天安門の偉容も毛沢東の写真も闇につつまれよう。しかし、その空間の中に市井の人びとが語り合う声は流れていよう。4節までの分析にしたがえば、天安門広場は、西欧的な市民広場—公共圏(public sphere)の原型とはきわめて縁遠いものにみえるかもしれない。しかし、闇のなかの夕涼みの広場はどうか。想像でしかないが、それはひょっとして一個の巨大な胡同と化すのかもしれない。そこには「中国的な」公共圏へとつながる萌芽がやどされているのかもしれない(cf. Wan, et al., 1994)。そのレベルにまでふみこんではじめて、北京という都市の空間秩序においてとらえられた中国のモダニティはいくぶんなりとも明確な姿をあらわすのではないか。

6. おわりに——多義性の意味するもの

中国の内在的なモダニティは「封建的なもの」を「人民的なもの」におきかえ、それに向けて人びとを水路づける中に存在する。天安門広場はその空間的な表現である。しかし、その空間(広がり→広がりの中での人の動き)としての性格上、それはそのような水路づけに含まれない多義性を生み出さざるをえなかった。従来の中国現代史や社会学的近代化論は、はたして天安門広場の中の複雑な人の流れを分析する視角を持っていたのだろうか。この人の流れはまぎれもなく中国の「近現代」の産物なのだが。そしてその流れは、中国にとって内在的であり独自のものでありながら、魯迅や竹内好がとらえた「抵抗をへての近代」とも微妙にズレた位相に位置するのである。

本稿が考察の対象外とした第1次、第2次「天安門事件」の「群集」の中に現出したモダニティ(反モダニティ?)、そして正陽門の外側に位置するマクドナルドとケンタッキのモダニティ(cf.丹藤、1995)もまた、そのような多義性と結びつけて考察しなければならないだろう。

注

- 1) 本稿で使用した北京のフィールドワーク・データは、1995年度国際観光学科北京研修(流通経済大学社会学部国際観光学科、1995)に参加した大畑ゼミ「天安門」班によって収集されたものである。研修の総責任者をおつとめくださった渡辺博史社会学部長、研修団の団長として研修の実現に献身的に努力された香川眞教授、研修の全過程の指導にたずさわられた鈴木博教授、中本誠一教授、中崎茂助教授、根橋正一助教授、米田和史助教授、新納克廣助教授、谷内洋一郎講師、揚河清助教授(首都経済貿易大学)にまず敬意と謝意を表したい。中国の実情にうとい筆者の、初歩的でしばしばとんちんかんな質問に辛抱強くつきあってくださり、親切にご指導してくださった石橋秀雄名誉教授(フェリス女学院大学)、寺阪昭信教授、町田茂助教授、根橋助教授、米田助教授、揚助教授にも心から感謝する。「天安門」班を構成した田代大作(学生責任者)、海上弘義、金指政輝、金田泰洋、鴨志田啓一、櫻井薫、真田航生、佐間田成伸、高田太郎、前元裕樹の長期にわたる努力がなければ本稿はありえなかった。最終的に天安門広場を自らの研究報告書の対象に選んだ金指、櫻井、真田、高田とのゼミを通じての討論、また大畑ゼミの別の班に属した孫慧、河住大輔、日浦俊明がくれたアドバイスは非常に有益だった。田代と野口卓(鈴木ゼミ)の叱咤激励がなければ、薄志弱行の筆者は本稿の完成を放棄したかもしれない。中国語がほとんどまったくできない「天安門」班のフィールドワークがともかくも可能になったのは、現地ガイドの徐道明氏(中国招商局国際旅遊総公司日本公司)のひとかどならぬご配慮と協力によるものである。あわせて謝意を表したい。また、皇居前広場調査の設計と実査指導は金指によって行われた。デ

ータの利用を許してくれた金指君に感謝したい。

筆者は本稿の草稿を日本観光学会第37回全国大会(1996年6月23日、北海学園北見大学)で発表した。司会をおつとめくださった高井薫教授(岡山商科大学)、有益なコメントをくださった鈴木登教授(近畿大学)、白石太良教授(流通科学大学)にも謝意を表する。

- 2) しかし、たとえば溝口雄三(1989,1990)がアジアの近代について「自生的近代」と「外来的近代」を分かつ必要を主張するとき、このような従来の近代史観からの離陸がなされるのである。また岸本美緒(1994)による「中国の市民社会論」の可能性に関する歴史的考察も刺激的である。
- 3) たとえば、富永はウィットフォーゲル以来の「東洋的停滞」概念を、いまだに所与の前提として受容している。また親族集団の解体を近代化のひとつの指標として重視しているが、溝口(1990:16)によれば、中国におけるモダニティの思想的課題である「公天下主義」の民衆的基盤には「宗族結合」が存在していたとされる。富永のネオ社会進化論には、このような歴史の動態の両面性についてのじゅうぶんな理解が欠けている。
- 4) たとえば、首都ブラジリアは「非常に純粋なモダニズムそのもの」として把握される。中南米の大都市にたいするツーリストの「まなざし」と、本稿があつかうような東アジアの歴史的都市にたいするツーリストの「まなざし」を対比して考えるうえでも、本稿にとって重要な先行業績だといえる。
- 5) 魯迅の現代小説のあるものは、当時の中国の民衆生活の「ふわふわ」した面までをよくとらえている。しかし、魯迅は『呐喊』『野草』『彷徨』などの作品集を公刊した後、しだいに現代小説を発表しなくなり、雑感文(論説)にみられる論争的なレトリックの世界に自らを定位していった(もっとも、雑感文に含まれる作品の中にも、たとえば「阿金」のような、人びとのくらしのなかの「モダニティのかたち」を浮き彫りにした秀作も散見するが。)戦後の竹内好にとって、「中国」はしだいに「戦後日本」の状況を逆照射するための、理想化された媒介と化していった。これらの点について詳論するためには独立した論考を必要とする。
- 6) 観光の定義については、たとえば、前田(1978:1-8)佐々木(1996)を参照されたい。
- 7) 中国の大学生の夏休みは7月10日前後から8月いっぱいぐらいである。聞き取りの時期に「学生が少ない」のは帰省中の学生が多いためではないかと思われる(町田茂助教授のご教示による)が、おじさんには「少ない」理由までは聞かなかった。
- 8) 中国の1990年国勢調査によれば、最大人口の少数民族は壮族(1549万人)、以下満族(982万人)、回族(860万人)と続き、ウイグル族の人口は少数民族中第5位(721万人)、モンゴル族の人口は第8位(481万人)となっている(山内(1994:26)より再引用)。本文中の発言は一北京人の「常識」の表明であり、人口統計上の事実とはかならずしも一致しない。
- 9) この計測は、中国の関係当局の許可を受けずに行った「ゲリラ調査」である。一定の調査者を1つのポイント周辺にはりつけ、人の移動を計測し続けることは、公安の注意をひくこと

になるのでできなかった。われわれが実行しえたのは二人一組になって、「観光客」として順番に各ポイントを回らせ、30分ごとに前とはちがう場所で入場者／写真撮影者数を計測する「巡回法」であった。しかし、計測を行う「天安門」班の人数は10名(5組)に過ぎないにもかかわらず、調査前の検討で計測すべきポイントを本文中の8箇所以下にへらすことはできなかった。それゆえ、表1に示すように、各ポイントの計測時間間隔は不規則にならざるをえなかった。また毛主席記念館は調査当日の午後、閉館することをあらかじめ確認できたので、入場者数ではなく、広場側からみて建物正面に向けての写真撮影者数を計測するように指示することができた。しかし、人民大会堂は計測を開始した後、当日午後にかぎって一般人の立ち入りが禁止されていることが確認され、入場者ゼロと記録した組と、写真撮影者の数を数えた組という不統一が生じてしまった。またエスニシティのカテゴリーもより複雑なものを採用していたが、組ごとに判定基準の違いが生じてしまい、データの信頼性を保持するために、いくつかのカテゴリーを統合した結果を提示した。

- 10) 本来、天安門広場のデータとの厳密な比較を意図したものではないため、エスニシティの分類基準は表1のそれとは完全には一致していない。
- 11) このようなツーリストの分布は、各ポイントへの入場料の差、各ポイントの混雑度に基づくツーリストの合理的選択の結果として生みだされたものであるかもしれない。たとえそうであるにしても、結果としてこのような不均等な人の集中が形成されることの象徴的意味は否定しえない。
- 12) 金指政輝は、広場の中で移動する人を「尾行」し、人びとの移動経路、停止した場所、停止時間を記録する「尾行法」を考案し、「天安門」班全体で行うように提案したが、準備不足から「尾行法」にもとづく体系的データを収集することはできなかった。
- 13) しかし、故宮の内部まで含めて考えれば、ツーリストは圧倒的に南－北方向に移動していることになるはずだという白石太良教授の指摘は説得的であった。故宮の「ウチ」と「ソト」を包含する空間構造と観光行動の総体的把握もまた今後の課題ということになる。

参考文献

- 1984→1989 「北京城市建设総体規則方案(簡本)」段柄仁(主編)『北京改革十年』北京出版社
 侯仁之(主編) 1988 『北京歴史地図帳』北京出版社
 朱自煊(李逸定訳) 1994 「北京——五朝の古都と新中国の首都と」張在元(編著)『中国 都市と建築の歴史』鹿島出版会
 1995 『地球の歩き方 96 北京』ダイヤモンド社
 Eisenstadt, Shumuel N., 1987 "Introduction: Historical Traditions, Modernization and Development," In, S. N. Eisenstadt, *Patterns of Modernity, vol.1 The West*, Pinter.
 船越昭生 1985 「中国の歴史的都市」藤岡謙二郎(編者代表)『歴史的都市』(講座考古地理学 3) 学生社

- Giddens, Anthony 1990 *The Consequences of Modernity*, Stanford University Press.=松尾・小幡（訳）1993 『近代とはいかなる時代か？—モダニティの帰結』而立書房
- 岸本美緒 1994 「『市民社会』論と中国」『歴史評論』第527号、56-72ページ
- 小島晋治・丸山松幸 1986 『中国近現代史』岩波書店
- 前田勇（編著）1978 『観光概論』学文社
- 溝口雄三 1989 『方法としての中国』東京大学出版会
- 溝口雄三 1990 「中国儒教の10のアスペクト」『思想』第792号、5-29ページ
- 根橋正一 1992 「経済都市上海と中国の帝都型都市」『武蔵野短期大学研究紀要』第6輯、45-56ページ
- Ofer, Gur 1987 “Economic Aspects of the Modernization of Russia and China”, In, S. N. Eisenstadt, *Patterns of Modernity, vol.2 Beyond the West*, Pinter.
- Rabinow, Paul 1992 “A Modern Tour in Brazil”, In, S. Lash & J. Friedman (eds), *Modernity and Identity*, Blackwell.
- 流通経済大学社会学部国際観光学科 1995 『第1回海外研修：北京研修旅行報告書』
- 佐々木宏茂 1996 「観光の成立要因分析に基づく観光学対象領域」『日本観光学会誌』第28号、13-18ページ
- Shields, Rob 1991 *Places on the Margin: Alternative Geographies of Modernity*, Routledge.
- 塩原勉 1994 『転換する日本社会』新曜社
- 竹内好 1948 → 1993 「中国の近代と日本の近代」『日本とアジア』筑摩書房
- 丹藤佳紀 1995 「快餐（ファストフード）」『キーワードで読む現代中国』岩波書店
- 富永健一 1996 『近代化の理論—近代化における東洋と西洋』講談社
- Urry, John 1990 *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage=1995 加太宏邦（訳）『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局
- Wan Hui, Leo Ou-fan & M. M. J. Fisher 1994 “Is the Public Sphere Unspeakable in Chinese? Can Public Spaces (gonggong kongjian) Lead to Public Spheres?” *Public Culture* 6, pp, 597-605.
- 山内昌之 1994 『民族の時代』日本放送出版協会